

④『東洋美術史』（既出）研究成果をもとに一層詳細に記述したものの。なお、本書に図版を加えたものが大村西崖、田辺孝次共撰として昭和八年に平凡社から発行され、同二十五年に風間書房がそれを再版した。

⑤『支那絵画史大系』大村西崖校輯。大正十四年十月本校校友会より発行。凡例によると本校東洋絵画史教科用として編集したもので、歴代名画記、図画見聞誌、画継の三冊の合綴（漢文）である。西崖は本書をもとに大正十四年十月から約半年ばかり本校内外の有志を対象とする課外講義（火曜日）も行なっている。

以上は西崖の本校教師という職務を中心としてみた場合の活動であるが、前出金子静枝宛書簡に明らかのように、西崖は美術批評家としても顕著な活動をした。この点については庄司淳一著「美術と自然・大村西崖の『自然』思想」（『日本の美学』第十号。昭和六十二年五月）、吉田千鶴子著「大村西崖の美術批評」（『東京芸術大学美術学部紀要』第二十六号。平成三年三月）等の研究があるが、要するに西崖は京都市美術工芸学校教諭時代に「彫塑ノ美術界ニ於ケル地位」（『京都美術協会雑誌』第十七号。明治二十六年十月）を発表したのを発端として新聞や雑誌に美術に関する論説を寄稿し始め、特に明治三十一年から同三十五年教授昇格までの間は、反岡倉寛三派の美術批評家として筆を揮い、美術界に大きな影響を与えたのであった。その評論は上述の美学理論を土台とし、自然主義を提唱してそれを彫刻、日本画の制作領域にも浸透させようとした点に特色があった。彼は无声会、彫塑会の発足を促し、明治三十三年春に両会が第一回展を開いて以来、極めて好意的な批評を書き、その一方で同じく三十

三年春から顕著になった日本美術院の横山大観、菱田春草らの無線描法による彩色日本画の試みを「朦朧体」「漂渺体」と呼んで激しく非難し、そのため、大観らの作風は一般に「朦朧体」と呼ばれるようになった。西崖の評論は展覧会批評に限らず美術に関するさまざまな問題に亘っており、執筆量は膨大であった。彼は『美術評論』（明治三十年十一月創刊）の第一号から第二十号まで主筆をつとめ、これに岳南、無記菴の筆名あるいは無署名で執筆を続けたが、その一方で、本名及び無記菴、局外生、△△生（寺山星川と共著）、無名子、書記生、海士などの筆名で新聞や雑誌に執筆を続けた。

⑤ 楠公銅像の完成

皇居前広場の楠公（楠正成）銅像は第一巻第二節に記したとおり、明治二十三年に本校に対して製作依頼がなされ、本校の依頼製作事業の第一号となったものであるが、同二十六年に木型が完成し、天覧に供したのち、岡崎雪声が本校内の鑄造場でこれを鑄造し、同二十九年九月に完成（同三十四年五月十二日『民声新報』所載住友吉左衛門手記「楠公銅像の記」による）。以後校内に置かれていた。同三十二年五月より宮内省の経費をもって石台の建設が始まり、翌三十三年四月にはほぼ落成したので同月十七日に銅像を本校から運び出し、同月三十日に現場に到着。運搬の様子を当時の新聞が次のように伝えている。

○楠公の銅像 兼て美術學校にて鑄製中なりし大阪住友家より宮内省へ獻納すべき楠公の銅像は今回落成（を）げ告を去る十七日美術學

校より引出だし目下皇城に向け運搬中なるが何様二千貫の重量を有し一丈五尺の高さあれば其運搬なか／＼困難にして二週間以上を費やさざれば皇城内に着せざるべしと云ふ 偕て此運搬方は神田美土代町一丁目一番地足立傳兵衛が請負ひ人夫二十名を以て曳き居れるが昨日迄には漸く萬世橋附近まで引出したるのみにして之れより本通りに出で萬世橋を渡り淡路町より神田橋を渡り丸の内に入り御濠端に添ひ日比谷より櫻田門に出で馬場先御門内の建設處まで運搬するの豫定なるが橋々にはウケを入れてそれを運ぶの手順にして其請負賃は一千圓以上なりと云ふ〔下略〕

(明治三十三年四月二十日『報知新聞』)

なお、同日付『日本』の記事によれば銅像には堅牢な板囲いを為し、周囲にはしめ飾りを施し、住友の定紋を置いた大提灯を四隅に掲げ、俗にコロと称する機械を用いて運搬したという。同年七月十日、据付工事等全て完成した。台座の左側面には記文を鋳出した銅板が嵌入されたが、記文の撰定と揮毫には紆余曲折があり、文学博士川田剛(甕江)撰文、織田宗之、文学博士重野安繹修撰、岡本碧巖揮毫の短い記文に定まって、これを本校が鋳造した。初め住友家および本校は二重橋近い場所に建設を希望したが、軍隊の訓練に支障を来す理由を以て二重橋外東馬場先門内の西南に建設されたのだという(『住友春翠』昭和三十年。同編纂委員会)。

⑥ 今泉雄作の辞任

明治三十三年八月二十三日、今泉雄作は本校教授から東京帝室博



今泉雄作

物館美術部長兼美術工芸部長に転任した。彼は本書第一巻に記したとおり、本校創設に係わり、教授となったのち、明治二十七年十月から同三十一年一月まで京都市美術学校長をつとめ、同年五月十日、岡倉覚三辞職後の本校に戻って教授となった。担当は東洋美術史、図案法、図案実習、東洋考古学で、彼の転任により、東洋美術史は大村西崖が、東洋考古学は小杉樞郎が引継ぎ、図案法は今泉が嘱託として暫くこれを続行した。今泉の図案法講義についてはすでに本書第一巻で紹介したが、東洋美術史講義に関しては西方俊造筆記「東洋美術史」が残っている。これは明治三十一年九月から翌三十二年六月にかけての講義筆記で、日本美術史、支那美術略史、日本彫刻史、日本金工史から成る。東洋考古学については本保義太郎筆記「東洋考古学」(富山県立美術館蔵)がある。筆記の時期は前者と同じである。

今泉は帝博に大正四年一月まで勤務し、傍ら文展審査委員や各種博覧会鑑査官を歴任し、古寺社保存会委員、帝室技芸員撰択委員もつとめた。大正十三年四月十四日より昭和六年一月二十八日の死去まで本校嘱託として考古学講義を担当した。彼は東洋美術学者としてだけでなく、茶人としても有名で、茶道関係の書物を多く所蔵することでも知られていた。それらの書物は国立国会図書館に「今泉